

「なつかしい」がある場所

小さな頃の思い出というものは、その隅々までは鮮明に覚えておらず、まるでずいぶん前に撮られたフィルム映画のように断片的でぎこちなくって、どこかオレンジがかかった世界である。きっと誰しものが、たまにふと思い出すような記憶があるのではないだろうか。そんな昔のひとときに浸れる場所が、新座市にはある。

新座駅から川越街道を東に向かって歩くことおよそ10分。大型量販店が立ち並ぶなかにぽつんと現れるのが、私の好きな野火止公園である。特にこれといった特徴があるわけではなく、ありふれた市街の公園といえる。園内にはたくさんの草木と少しの遊具、そして敷地の端っこには用水が流れ、ミニチュアの世界みたいな小さな丸太橋がかかっている。休日に行くと子ども連れの家族や小学生たちがにぎやかに遊んでいるから、私はいつも邪魔をしないように、平日の学校やアルバイト終わりなどに訪れることが多い。

新座はもともと水がほとんど流れない土地で、今のようなインフラのない時代は、人々が生活するにはとても大変な土地だったという。そんな中、1653年に当時の川越藩主であった松平伊豆守信綱が野火止新田開発に着手し、用水が作られ、ようやくここ新座に水が流れた。そしてこのごくありふれた公園に流れる用水こそ、新座に水を運んできた偉大なる用水なのである。今日の新座の発展があるのも、この用水のおかげといえるかもしれない。私はこの公園がひそかに隠し持っている歴史の跡も気に入っている。

野火止公園は季節ごとに違った景色を見せてくれるのも、大きな魅力である。春は満開の桜や風に揺れる菜の花が視界いちめんを覆い、アジサイが咲く梅雨を経て夏になると、私の顔よりも大きなヒマワリやタンポポの黄色が、草木の緑のなかでひとときわ映える。秋は落ち着いた色合いの紅葉が心を癒してくれて、冬になって葉の落ちた雑木林は見上げた空の鮮やかさを教えてくれる。私は特に冬の野火止公園が好きだ。他の季節のように色とりどりではないけれど、整然とした雑木林の小道を一步一步ゆっくりと進むだけで、なぜだか私は心が洗われてゆくのを感じる。雪など降った日には、私は喜んで野火止公園に向かい、白い地面にこっそり自分の足跡をつけるのである。そうしていると、幼いころの記憶が少しずつ呼吸をはじめ。

私は野火止公園を歩いていると、よく祖父と遊びに行った、地元の公園を思い出す。私は新座で生まれ育ったわけではなく、たまたま進学の関係でここ新座へ来た。けれど、この野火止公園の懐かしさは一体何だろう。昔の記憶に包まれて、思わず泣いてしまいそうなこの感覚。言い表せぬ懐かしさを、私以外の誰かも、きっと感じてくれるだろう。日が暮れてきて、丸太橋を渡り帰路につく。新座駅までは、あと少し。振り返って公園を眺める。もう会えない祖父の懐かしい匂いが一瞬、私の鼻をかすめた気がした。